The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本学学生企画セミナー「「聞き耳」を問う ： 他人の「話」に耳を傾ける学問のために」報告
Author(s)	三浦, 詩織
Citation	日本学報. 2013, 32, p. 123-129
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25557
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本学学生企画セミナー 「「聴き耳」を問う —他人（ひと）の「話」に耳を傾ける学問のために」*報告

三　浦　詩　織

近年、「オーラル・ヒストリー」もしくは「ライフ・ヒストリー」などの観点から、「聞き書き」という調査手法に関心が集まっている。特に、震災という大きな画期を経験した現代日本にとって、公式の文字資料に刻まれることのない、しかしきわめてリアルな市井の人々の声を記録することは、今までに例を見ぬ切実さを伴った急務といえるかもしれない。

他方、研究者という立場で聞き書きの資料に接するとき、私たちは、眼前のテキストの向こうに、生身の声や聞き手の志向といった、さまざまな要素で構成される回路が広がっていることを、ほとんど意識することはない。聞き書きとは本来、発話の現場に始まり、その声を文字に移すディクテーション、そして、そのディクテーションをさらに加工して論文という型に落とし込んでいくところまで、時間的にも空間的にも広がりを持った作業を指す。その網目をくぐり抜ける試みなしに、個の声を大文字の歴史に還元させて行く手つきは、どこか危うさをはらんではいないだろうか。

講師である重信幸彦氏は、主に民俗学のフィールドにおいて、こうした聞き書きの場に

＊講師に重信幸彦氏（国立歴史民俗博物館研究部客員教授）をお招きして、2012年12月７日に大阪大学豊中キャンパスで開催。企画者は、三浦詩織（代表）、山口良太（副代表）、薫友明、姜超、湯天軼、川村亜紀、ファクンド・ガラシーノ。

現出する言葉と向き合い、その語り口や身体性に寄り添いながら、研究活動を展開している。また、数々の仕事を通じて、絶えず自身の聞き書きのあり方を問い直し、その全容を意識化するための試行錯誤を繰り返してきたことも、氏の研究の特徴として指摘できよう。

主として口承文芸の分野で氏の仕事に触れることの多かった筆者は、以前よりその文体と洞察に惹かれていた。ときに過激に、ときに穏やかに、テンポにこそ多少の転変はあれど、その文章は一貫して、ある種の葛藤を内包していたように思う。それはおそらく、他者の語りを全身でもって受け止める聞き手としての自分と、否応なしにそれを「編集」し、学術論文の体に仕立てていかなければならない自分とのせめぎ合いであったのだろう。聞き書きという作業の時間的・空間的な広がりの中で、二つの「自分」は引き裂かれていく。聞き手として感得した、語りの調子、身ぶり、果てはその場の空気といった諸々を、全て言語化することは不可能に近い。それでもなお、聞き手／編集者のいずれの立脚点をも手放さず、両者の融合を図りながら、人の「話」に向き合い続けるその真摯な態度に、いつか腰を据えて話をしてみたいと思ったものだった。

今回、思いがけず実現したこの企画を通じて、筆者ら企画メンバーは、他人の話を聞き、そしてそれを記述していくということについて、徹底的に考えようと決めた。タイトルは、「「聴き耳」を問う」——そう、「耳」である。ICレコーダーという便利ツールが幅を利かせる21世紀に、なんてアナログな、との誹りは承知の上で、「耳」である。なぜそこに拘るのか。拘る理由は、セミナーで重信氏が述べた次の言葉に集約されている。

講師の重信幸彦氏

> 今僕らは、場合によっては機械に聞かせていて、後で文字に起こしてそれを読んでいるだけで、「本当に聞いてるのかよ⁉」と思うことがちょっとあります。そこで、あえて「聴き耳」と言ったのは、我々は、自分たちの身体を話者の前に持っていって、その人の話を身体でもって聞き取ってきて、そして、自分の身体を通して話を素材化して使うというふうに、自分が「分かった」と思うまでに、認識を生産していく、かなり複雑なプロセスがあるはずなんですよね。でも、テープや録音機を使っちゃうっていうのは、そのへんのことをあまり問わないで済んでしまうんじゃないか、と。

つまり「聴き耳」とは、話を聞き、ときには自らも話者として質問や応答を行い、そうして紡ぎ出された語りを書き起こし、編集し、アカデミックな体裁に仕上げていくという、

一連のプロセスを指している。私たちが問いたいのは、おそらくデジタル機器が有していないであろう、この広がりである。

また、「聴き耳」を捉えるべく、重信氏は、現出する声を、ゆるやかに「おはなし[1)]」と名づける。「ナラティブ」でも、「口承文芸」でも、「オーラル・ヒストリー」でもない。そうした学術的な分類を施される以前の、日常レベルに身を置いたものとして、人の話と向き合いたいという信念の表れであろう。ゆえに、筆者も、今回のセミナーを、重信氏と参加者が織りなす「おはなし」と捉え、その「聞き書き」として、この報告書を記す。主観にまみれ、忠実な記録としての役目は果たせそうもないが、これが筆者の「聴き耳」であると開き直ってみることにする。その点、ご承知おき願いたい。

セミナーは三部構成をとって進められた。このプログラムを組むにあたり、筆者らの学部時代の恩師である、北九州市立大学の真鍋昌賢氏を交え、メンバーによる事前勉強会を開催したことを付記しておく。詳細を述べると、さらに冗長になりそうなので割愛させていただくが、重信氏の主要な研究を読み解く中で、各々の「聞く」という行為に対する問題意識が抽出されていったということだけ記しておきたい。そして、ここで提出された論点に対応する形で、下記「パート３」が設置される運びとなったのである。

本論に入る前に、こうして完成したプログラムを、以下に転載する。

＜パート１＞「柳田国男という「聴き耳」」

「豆手帖から」（1920年）をはじめとする、初期柳田の仕事に見られていた、語り手の叙述という可能性。しかし、その後の民俗学は、そうした個の語りへの聴き耳を、次第に周縁に追いやっていく。その一連の動きを、思想史・近代文学とのかかわりの中で論じる。

＜パート２＞「記録／聴き耳の時代：1950年代」

昨今、「記録の時代」として注目されつつある1950年代であるが、それと並行する形で、個人のライフ・ヒストリーにじっくりと耳を傾けることに力点を置く活動も展開されていた。パート２では、それらの運動の中で、「民話運動」「サークル運動」といった動きを取り上げ、講師自身のフィールドワーク体験を交えながら、当時の民俗学が見落としてきた可能性を考える。

＜パート３＞「聴き耳のゆくへ」

宮本常一の「土佐源氏」批判の再検討、講師によるタクシー・ドライバーからの聞き取りや、福岡市の市史編纂などを具体例としながら、「聞く」「話す（＝聞き手の発話・相槌、その他場を構成する行為）」「書く」という一連の認識生産の過程について、

参加者各々の経験を突き合わせる。テープレコーダーを前提にした資料化は、現実の写生として捉えられがちであるが、実際の「聴き耳」と書く過程は、聞き手の主観を含み込んだ一つの「翻訳」である。そうした「翻訳」から、いかに大文字の歴史に肉薄できるか、研究者としてのあり方を問いかける。

エッセンスはおおむね列挙してあるため、この場で今一度、細かい内容を追うことは避けたい。それでは、「おはなし」の大きなうねりのようなものを取り逃がしてしまうように思えてならないのである。ともすれば細部を排除してしまう危険をあえて冒してでも、ここでは、「聴き耳」をめぐる重要な指摘を、筆者の独断と偏見でもって拾い上げ、「他者の話を聞くとはどういうことか」という初発の問いへの、自分なりの答えとしていきたい。

パート１において、日本民俗学の祖である柳田国男の仕事をして語らしめようとしたのは、彼が他者の声を素材化するために行っていた試行錯誤の軌跡である。当時から、近代における言葉の問題にきわめて自覚的であった柳田は、自然主義や言文一致運動、速記の登場といった社会情勢においても、声の写実がすなわち事実を表すという信仰に懐疑的であった。むしろ、事実をいかに理解できる文体で記すか、つまり、叙述こそが問題なのだと考えていた節がある[2)]。文字化の工程でもって、事実に対する認識の生産を完結させていた自然主義一派に対し、柳田の「聴き耳」は、声をいかに叙述し、そして読者に届けるかという広がりを有していたといえよう。換言すれば、それはきわめて方法的な意識の下で聞き、書いていたということでもある。

この戦略的な「聴き耳」を50年代において実践していたのが、木下順二らによる「民話の会[3)]」が提唱した「民話運動」、谷川雁・森崎和江らが率いた「サークル村[4)]」といったフィールドで活躍していた人びとであると重信氏は指摘する。彼らの聞き書きによるルポルタージュ風の作品群は、左翼文化運動の啓蒙という大きな文脈に身を置いていたこともあり、誰に、何を、どういった言葉で語りかければよいかという、深い思考に裏打ちされていた。そしてそれゆえに、それらの作品は、しばしば声の写実からは逸脱していく。宮本常一の「土佐源氏[5)]」（『民話』第11号所収、1959年）や、石牟礼道子の「奇病—水俣病漁民のルポルタージュ[6)]」（『サークル村』第３巻１号所収、1960年）などは、前者は、実際の話者の語りと異なる、後者は本来的にインタビューをしていないとして、往々にして批判の俎上に挙げられる事例である。しかし、宮本が、あえて自身の出身地である周防大島の方言に引き寄せて、土佐の老人の語りを構築したことは、「自分の分かる言葉で叙述しなおす」という、きわめて高度な解釈行為とは言えないだろうか。同様に、インタビューという形式の有無で、石牟礼の業績を判断することもまた早計である。彼女は間違いなく、水俣病患者と場を共有し、彼らの声に耳を傾けていた。だからこそ、自らが感得し

た「おはなし」を、政府の文書・医学論文・報道といった、病をめぐる同時代の諸言説と突き合せながら、それらと布置関係を築く形で、声の叙述を織り上げていくことができたのである。その試みの成功を、『苦海浄土』という作品が体現していることは、言うまでもあるまい。

こうした聞き書きのありようを、安直に「事実と違う」「改作である」として切り捨ててしまっては、彼らの「聴き耳」の本質を見失ってしまうと重信氏は指摘する。むしろ、全身でもって他者の話を聞き、そしてそれを文章として編集するという、ともすればバラバラの工程として乖離しがちな作業をつなぐのは、宮本や石牟礼、そして前述の柳田のような、方法的な自覚に基づいた態度なのではないか、と。

そう考えたとき、ありのままの声を、ある意味実証主義的に「写す」身ぶりは、氏の目にはときに不誠実に映るという。パート３において、氏は、福岡市史[7]の編纂に関わった際に、話者の語りの「とっちらかり」をも忠実に文字化した原稿を却下したことについて、こう述べている。

> （引用者注：話者の）矛盾や飛躍や混乱というものを、きっちりとこちらが問うて、それを豊かなものとして提示できるのならば、示してもいいですけど、それをすっぽんぽんのまま、「話者が語ったからこのままでいいよね」って出すのは、僕ははっきり言って無責任だと思ったんですね。

無責任——強い言葉である。そして重い。しかし、その強さ、重みこそが、「聴き耳」が内包するもの、換言すれば、私たちが負うべきもののように思う。他者の声そのものは、発せられたその場で霧散してしまう。しかし、それをひとたび、自分の身に向かってきたものとして「聞いた」とき、主体である私たちは、「聞きっぱなし」ではいられない。いかにしてこの言葉たちを引き受け、解釈を加え、理解に至り、そして表現していくか、幾重ものプロセスをくぐり抜け、そのたびに重みを増す「おはなし」を、それでも最後まで背負い続けていく、もしくは、他の聞き手／書き手が担ってきたそれを、読者として引き受ける覚悟こそ、個の声を、より大きな「おはなし」——「歴史」と重ね合わせる際には、必要なのではないか。

こうした手つきを経た聞き書きの資料が、「正史」たる文字資料に対する補完的・二次的な役回りに終始することはあるまい。個人の声から編み上げていった「事実」は、ときに「正史」を揺るがす。少なくとも、そうしたエネルギーの源泉として、「おはなし」はあり、そのエネルギーを汲み上げ、転化する装置が「聴き耳」なのだと言うことはできるのではないか。

一方で、いくら覚悟を持って負っても、埋めようのない溝が、私たちと「おはなし」の間に横たわっている。

例えば、人の話を「かっぱらう」ことで、研究を構築する後ろめたさ。あるいは、「いくら話したってあんたには分からない」と、ロジック以外の部分で突き離されること。フロアから寄せられた意見は、司会（筆者である）の至らなさゆえに、断片的な問題提起となってしまったが、いずれも、この溝の存在を示す、重要な論点であったと思う。

残念ながら、いくら優れた「聴き耳」の持ち主でも、他者の「おはなし」を丸ごと汲み取ることは不可能である。重信氏の言葉を借りれば、聞き書きとは一種の「翻訳[8)]」であるが、当然、中には自分の翻訳能力を超えた「おはなし」が存在する。そしてそれは、多くの場合、「経験」という、非常に言語化しにくい領域に根を張り、そこから引き剥がすことはできない。経験を持つ者が、持たぬ者に対して語りかける場合、その語りが、「訓示」か「拒絶」の形をとることが多いのは事実である。「あんたには分からない」という言葉は、後者に当たるのだろう。この断絶は、必ずしも絶対的ではないが、すぐに解消できるものでもない。「そのまま受け止めるしかない」という重信氏の苦渋の声が、そのたびごとに立ちすくむしかない私たちの、不器用な歩みのありようを体現していたように思う。この問題に対する答えは、私にもまだない。

戦略的に、覚悟を持って、そしてときには立ち止まりながら。「聴き耳」とはかくも複雑怪奇なものである。「「聴き耳」を問う」と題しながら、投げかけた問いは、ことごとくあらぬ方向に弾き返されたように感じられてならない。しかし、強いてこの企画の意義を挙げるとすれば、それは、自身の研究のあり方を問い直し、対象化するための視角を、「聞く」という行為に立脚する形で設定できたことだろうか。自省の方法は数あれど、独り内にこもっていては、そのアプローチはいずれバラエティを欠く。今回、あえて複数人が集まる場において、自分自身を見つめる機会を設けたことは、そうした行き詰まりに対する、ささやかなヒントとなりうるかもしれない。少なくとも、他者の話への「聴き耳」は、議論の中で、私たちが思っていた以上の広がりを見せてくれた。その裾野に寄り添いながら、ほんの少し、足元を見つめることも必要ではないだろうか。

もとより明確に結論の出るテーマではないにせよ、ひとえに司会（繰り返すが筆者である）の未熟さゆえに、必要以上にまとまりを欠いてしまった。この場をかりてお詫びするとともに、このセミナーを通じて提示されたさまざまな論点が、今後の個々の研究において、なんらかの糧となるよう、祈るばかりである。

最後に、企画全般にわたってご指導いただいた川村邦光教授、事前交渉の段階からさまざまにアドバイスをくださった真鍋昌賢氏、そして、講師として遠路はるばるいらして

いただき、貴重なお話をお聞かせくださった重信氏に心からの感謝を申し上げ、結びとしたい。

注

1）余談だが、以前別の枠で本学にお招きした、大月隆寛氏と高木史人氏を、重信氏は自身とともに「日本民俗学の隠れたる「おはなし」学派」と称した。大月・高木両氏のセミナーについては、黛友明「“民俗学的知性”とは何か―大月隆寛さんをお招きして」、および、三浦詩織・山口良太「「メディア」としての私たち―方言研究と昔話研究を手がかりに」（いずれも『文化／批評 cultures／critiques』臨時増刊号（2012年）所収）を参照のこと。

2）柳田国男「言文の距離」（『柳田國男全集』第23巻、筑摩書房、2006（初出1909）年）参照。

3）民主主義科学者協会の思想史研究会から派生する形で、1952年に結成された組織。現代において、民話を発展的に継承するべく、当時の著名な知識人たちによって活発な議論が行われたが、1960年に休会する。

4）北部九州の炭鉱地帯を拠点としながら、九州全体のサークルを「村」として連帯させるというコンセプトで展開した運動。機関誌『サークル村』は1958年から61年まで刊行された。

5）土佐・檮原村の橋下に住む盲目の老人「土佐源氏」が、自らの一生を語るという形式で綴られている。後に、民俗学の名著として名高い『忘れられた日本人』（1960年）に収録されるが、「土佐源氏」の身分や境遇に実際と異なる点があることから、聞き書きではなく、宮本の創作であるという批判がなされている（井出幸男「『土佐源氏』の成立」（柳田国男研究会編『柳田国男・民俗の記述』2000年、岩田書院）参照）。

6）水俣病患者の一人称の語りを中心に構成されている作品。後に、大幅に加筆・修正され、『苦海浄土』（初出1969年）に収録される。

7）『新修福岡市史特別編　福の民―暮らしのなかに技がある』（2010年、福岡市）参照。

8）基本的には「編集」と同様、肉声による「おはなし」を文字として表現する際の加工作業を指すが、重信氏は、声から文字へという、異なるメディアを横断するコントラストを明示するために、この語を用いているという。

（みうら　しおり　大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）